

13、PMD患者の体型に合わせた車椅子の工夫

国立療養所再春荘

阿南 薫 岡崎 浩子

佐藤 美代子 西島 寿一

米丸 瑞子

他筋ジス二病棟一同

この患者A氏は、ベット上では、起坐位で両下肢を左右に屈曲し、固定枕、固定坐布団を利用し、坐位を保っていた。両下肢を左右に屈曲した時の角度が広くひろがり、普通の車椅子に乗った場合、きゅうくつとなり、坐位固定も困難なため、次のような工夫をした。

(図1) 普通の車椅子の両側面を外し、食台を車椅子の坐面にのせる。この車椅子にベッド上での体位と同様に、固定枕、固定坐布団を使用し、胸部を固定ひもでくくり、坐わらせてみた。普通の車椅子に乗った場合、体全体を背中部分に、もたれた状態で乗っているため、上半身が固定されて、疲労度も増し、視野も制限される。改良された車椅子では、食台を使用したことにより、ベット上での坐位と変わりなく、特に食台の中央部に、丁度穴があるため、殿部がはまり、安定性が増し、視野も拡大された。そして、車椅子乗車中の体位変換も少なく、一回の固定ひもで、約30分間位は、持続でき、院外活動のショッピング時も、楽しく過ごせた。次に、この患者B氏は、脊椎の彎曲が著しく、坐位保持も困難で、日常生活を腹臥位様の体位で、過ごしていた。車椅子に乗る時は、体が変形しているため、枕などを使って工夫しても、非常に不安定で、患者も視野が制限されたりして、あまり好まず、ベット上での姿勢が、一番楽であるということで、腹臥位のまま乗れる車椅子を考えた。しかし、そのままの車椅子では背もたれをとって、腹臥位で乗せるにも長さが足りず、狭すぎて無理のため、車椅子の肘かけの上に板を乗せてはどうかと思い、腹臥位のままの長さを計り、1cm厚みの板を台として、車椅子に合せて切った。裏には、4.5cm×4.5cmの角材を2本、肘かけの内側に、はまるように取りつけた。このことにより、横づれと体重による板のひずみを防ぐことができた。次に乗せた時、重心が後ろにくるため、前の方に角材を6cm出し、その部分に切りこみを入れ、太いはり金で固定した。手押し部分には、角型に切り込みを入れた。

(写真1) このようにして、取り外しができる台を取りつけた車椅子は、患者からも喜ばれ、散歩やショッピングにも、たびたび使用された。しかし、材質が厚い板を使用しているため、持ち運びに重く、不便で、長時間乗っているには、堅いことと、曲げている足が手押し部分にあたり苦痛を訴えるなどの欠点が、あげられた。そこで以上のような点を考慮し、次のような改良した車椅子を製作した。(写真2)

図1

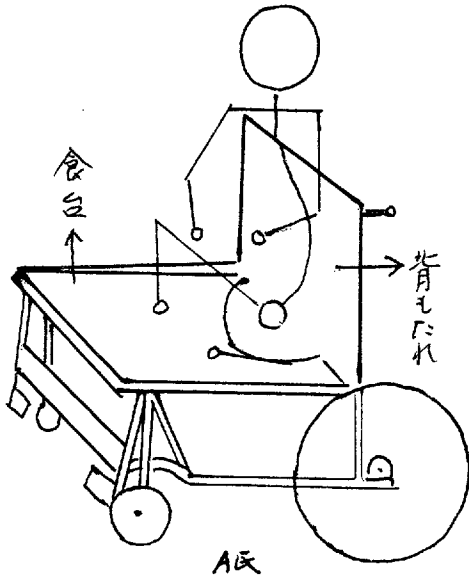


写真1

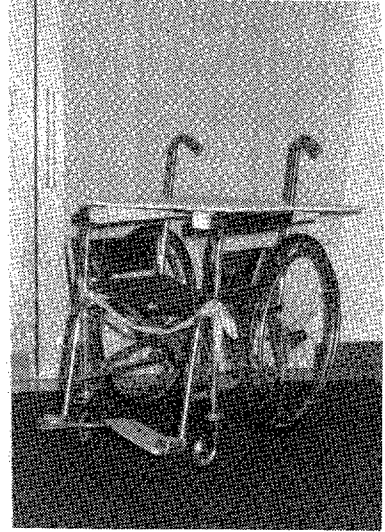


写真2

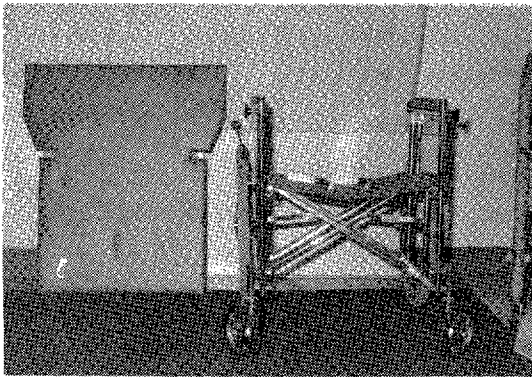


写真3



1.板を、スポンジ入りのレザーばりにする。2.幅を標準より6 cm 広くする。3.調節ねじを使い、取り外しができ、高さも調節できるようにする。4.後車輪を、手押しの伸ばした線より、垂直後方に、12.5 cm ずらし、重心が後にかかるようにする。5.持ち運びに便利な、軽い材質を使う。6.不必要な足台、背もたれ、車輪についている手こぎ輪をカットする。現在この車椅子を、散歩

レクリエーション、その他に使用しているが、乗りごちもよく、今までのベット上の生活よりさらに、行動範囲も広くなり、たいへん喜ばれている。(写真3)

今後も、さらにB氏に適した車椅子を、介助者が介助しやすい車椅子を、工夫していきたい。

14. PMD 症児 (者) の履き物の工夫

国立療養所宇多野病院

藤 木 るり子

PMD 症の障害度が、進行するに伴い、靴をはく事を煩わしく感じたり、材質や型の不適合から、素足による歩行が多くなるなど患児 (者) の安全性や行動範囲に、極めて密接な関連がある事が、日常患児 (者) を観察する中でわかった。


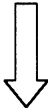
独立歩行から、車椅子使用の生活に移行する時期の不安定な歩行状況をより安全で、快適なものとし、行動範囲を拡げ、精神面においても好ましい影響を与えることを目的とした。

まず従来着用靴、その他の履き物の重量材質などについて比較検討してみた。その結果、従来の物は、PMD 症児 (者) のはき物として不適当な点が多く、患児 (者) の意見も含め、次のような条件を出した。重量は進行に伴う筋力低下を考慮し、より軽い物であること、底の材質は滑りにくく、しかも足運びが、スムーズに出来るもの、側面と甲の部分は、通気性と保温性に富むもの、型は、患児 (者) 個々の足との密着度が高く、着脱が容易なものなどの条件がわかった。

次に歩行の特徴をより詳しく知るため、足底部と床との接触面について、当院入院患児障害度3度～4度の7名を対象に、静止した時と、歩行時の足型を採取し、比較してみた。

7例中5例が、静止時より、歩行時のかかとの幅が狭く、尖足による歩行を示し、また歩行時足運びがスムーズにできず、指先を引きずった跡が見られた。以上の特徴が、より顕著に現れた症例について、適当な履き物を試作、検討してみた。

今回は、洋式トイレカバーの保温性に着目し、これを利用して改良を試みた。まず、足底部の滑り止めとして必要な部分に、ゴムを付けて着用した結果、従来の靴より歩行しやすいが、長時間の歩行には、弾力性に欠けるため、疲労するとの訴えがあり、次に、足底部の床面に接する部分に、薄いスポンジをはって見た。これも歩行状態は良好だったが、長い間使用すると、汚れにより、滑り止めの効果が減少し、それに加え、前の物と同様、着脱困難という欠点もあった。そこで甲の部分から上部にかけてファスナーを取り付け、開閉式にし、着脱容易にして疲労感を緩和するため、

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

この患者 A 氏は、ベッド上では、起坐位で両下肢を左右に屈曲し、固定枕、固定坐布団を利用し、坐位を保っていた。両下肢を左右に屈曲した時の角度が広くひろがり、普通の車椅子に乗った場合、きゅうくつとなり、坐位固定も困難なため、次のような工夫をした。

(図 1)普通の車椅子の両側面を外し、食台を車椅子の坐面にのせる。この車椅子にベッド上での体位と同様に、固定枕、固定坐布団を使用し、胸部を固定ひもでくくり、坐わらせてみた。普通の車椅子に乗った場合、体全体を背中の部分に、もたれた状態で乗っているため、上半身が固定されて、疲労度も増し、視野も制限される。改良された車椅子では、食台を使用したことにより、ベッド上での坐位と変わりなく、特に食台の中央部に、丁度穴があるため、殿部がはまり、安定性が増し、視野も拡大された。そして、車椅子乗車中の体位変換も少なく、一回の固定ひもで、約 30 分間位は、持続でき、院外活動のショッピング時も、楽しく過ごせた。